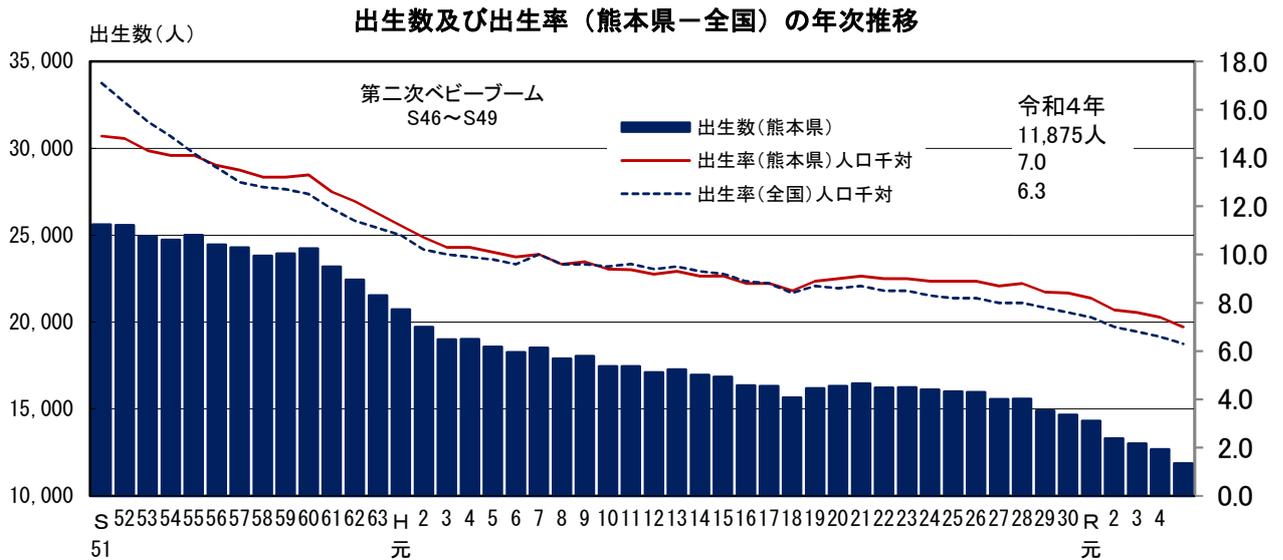


2. 出生

(1) 令和4年は、本県の出生数は前年より795人減、出生率は7.0で前年より0.4ポイントの減

出生数は、全国で770,759人で前年より40,863人減少した。本県は11,875人で前年より795人減少している。

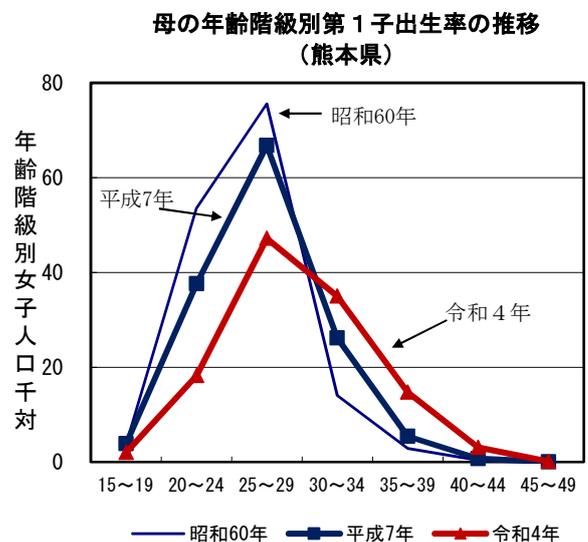
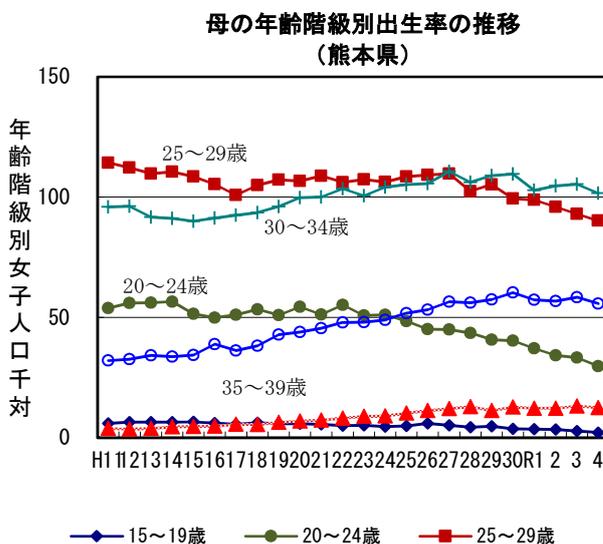
出生率（人口千対）は全国6.3、本県7.0で、全国は前年から0.3ポイントの減、本県も0.4ポイント減少している。



(2) 昭和60年・平成7年と比較すると晩産化している

出生率（人口千対）を母の年齢（5歳階級）別に前年比で見ると、30～34歳、35～39歳代で増加している。

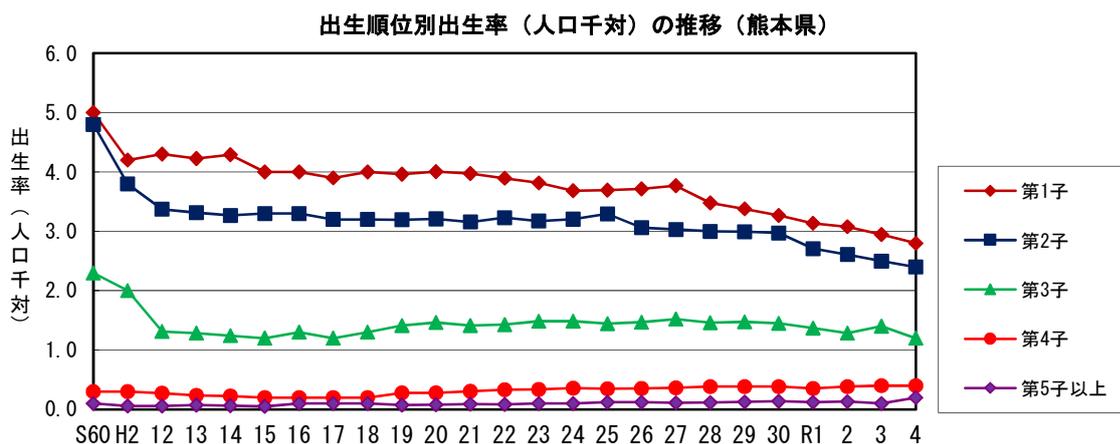
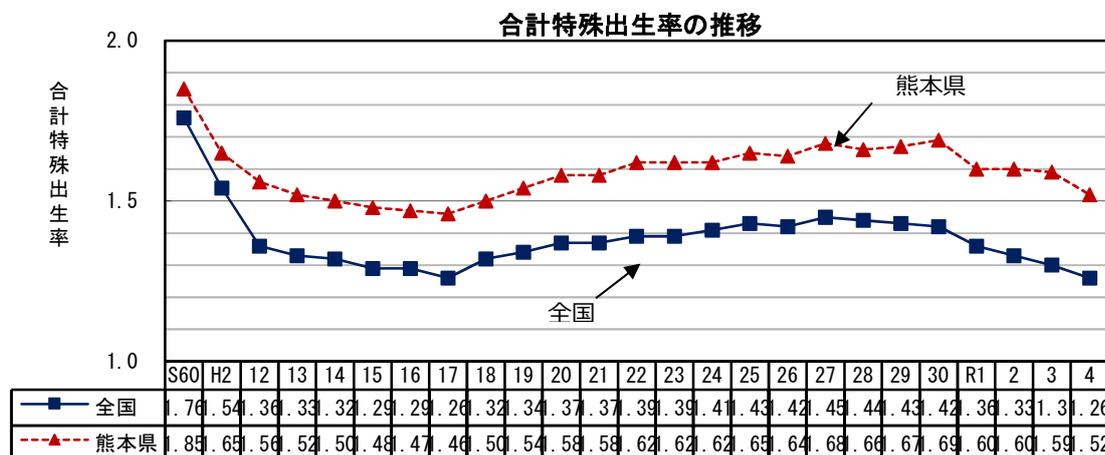
第1子の出生率を母の年齢（5歳階級）別に昭和60年、平成7年と令和4年で比較してみると、30歳代が特に増加傾向であり、晩産化がうかがえる。



(3) 本県の合計特殊出生率は1.52で、前年より0.07ポイント減

合計特殊出生率は、令和4年は全国は1.26、本県1.52で、全国は前年より0.04ポイントの減、本県は0.07ポイント減となった。（合計特殊出生率とはその年次の15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子ども数に相当する。）

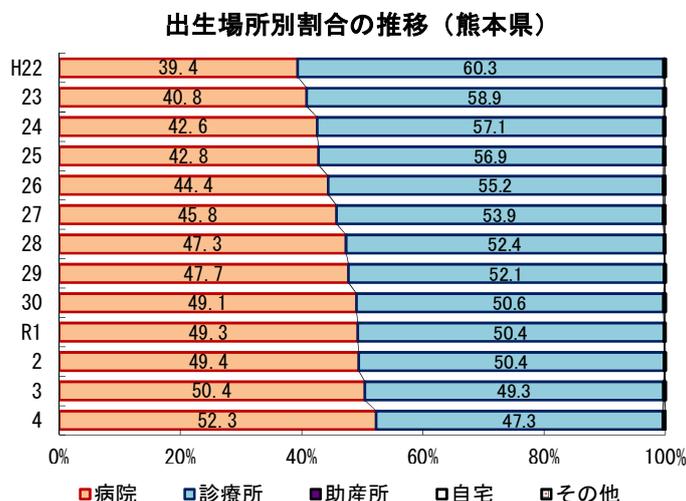
また、本県の出生順位別出生率は、令和4年は第1子、第2子、第3子は減少傾向だが、第5子以上は、やや増加傾向となった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(4) 出生場所は99.6%が医療施設

令和4年は病院・診療所・助産所の医療施設における出生が99.6%を占めており、自宅、その他での出生は0.4%である。平成以降その傾向が続いている。



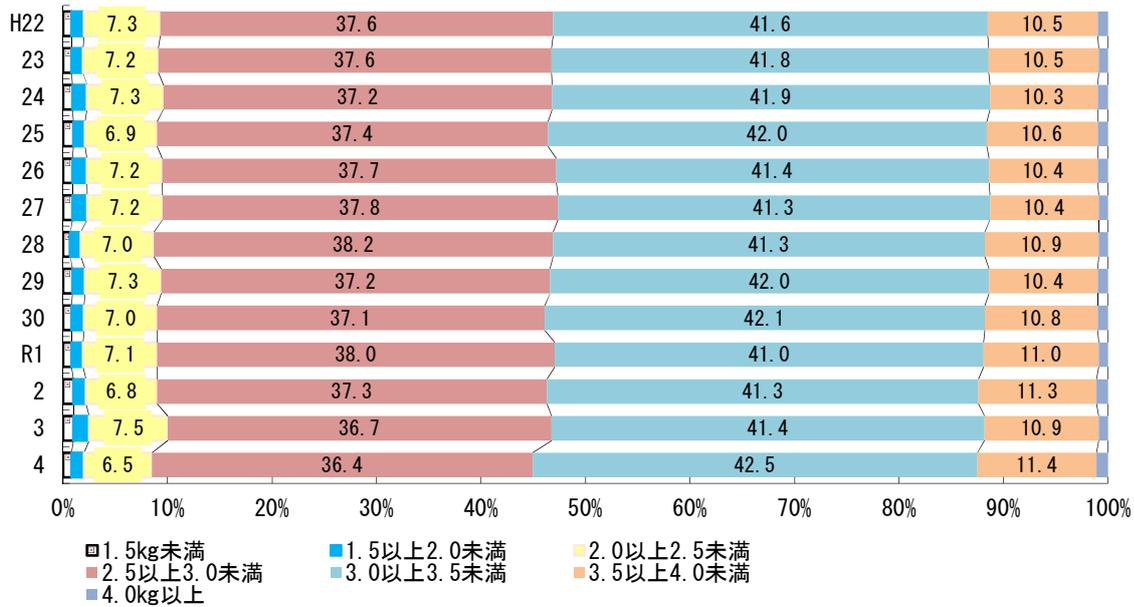
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(5) 出生時体重が2.5kg未満の出生児割合は前年より1.5ポイントの減少

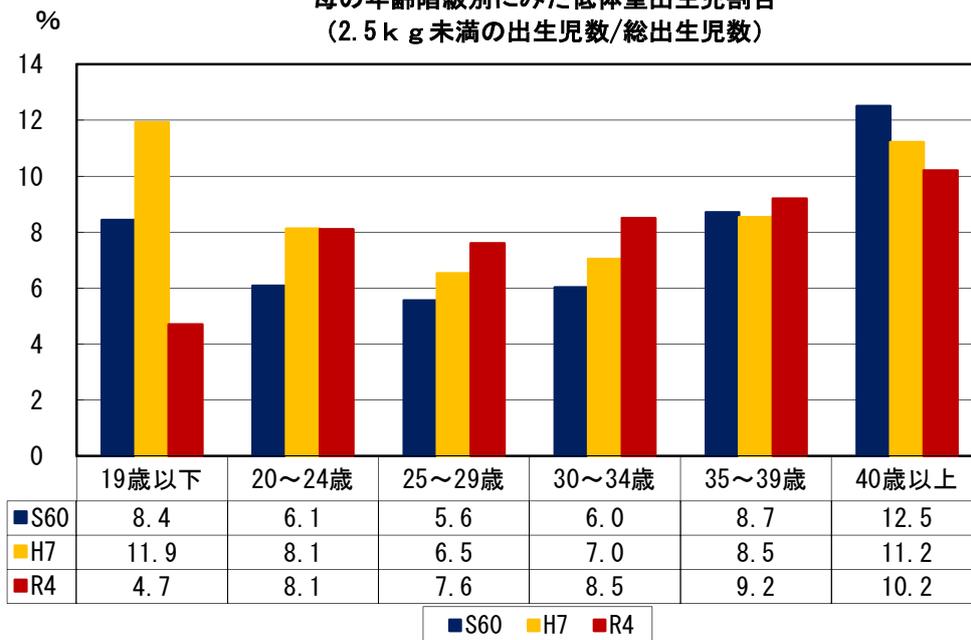
出生時体重別割合の年次推移をみると、体重が2.5kg未満の出生児の割合は8.5ポイントで、前年より1.5ポイントの減少となっている。

低体重児（2.5kg未満）の総出生児に対する割合を、母の年齢階級別に昭和60年・平成7年と比較すると、19歳及び40歳以上の年齢以外のすべてで低体重児を出生する割合が高くなっている。

出生児数の出生時体重別割合の推移



母の年齢階級別にみた低体重出生児割合
(2.5kg未満の出生児数/総出生児数)



資料) 厚生労働省「人口動態統計」